

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第16回 仏具は続くよ、どこまでも
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：3 - 3
刊行日 Issue Date	2018-08-30
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6243

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第16回

か、読者の皆さんはお分かりになるだろうか。

見える。木魚に何ら手を加えることなく、見事に見立てて

顔に用いてい

いの。

この作品を制作した太田信成氏にお会いして、お話を伺うことができた。何と太田氏はお寺の住職であった。地区内に二つあるお寺で使っている仏具を用いて、作品を作り続けてきたそうである。毎年、作品に用いる仏具が美しいと思っていたが、実際に法要に用いる道具を借用しているとは思っても奇らなかった。かつて「一式飾り」や「造り物」は、実際に使っている生活道具を隣近所から借りてきて、傷つけないよう丁寧に作品に用いていた。現在は使われなくなった道具をストックして用いる地域がほとんどで、昔ながらの方法が続けられているとは驚きである。

さらに驚くべきことに、連載の第5回で触れた江戸時代の『造物趣向種』(つくりものしゅこうのたね)の中にも、木魚など仏具一式を見立てた作品があった。安政7(1860)年刊の『造物趣向種』には、小ぶりの木魚を顔に、大きな木魚を太った腹に見立てた、「布袋」(ぼてい)という作品が掲載されている。昔も今も人間は変わららず、木魚から人の顔を連想するものらしい。神聖な仏具を見立てて楽しむのは不謹慎かもしれないが、そのギャップの大きさをゆえに、仏具一式の作品を見る者は思わず微笑んでしまう。

天保8(1837)年刊の『四季造物趣向種』の中には、次のような一節がある。地藏尊の御祭など、造り物という、たわむれなくては、ともし火に油のなきに似たり。

時代が変わっても、おおらかにユーモアを楽しみたいと願う人々の気持ちは変わらないう。年に一度の祭りのハレの日、仏具が非日常の世界を現出して楽しませてくれる。「宇治平等院」が現れたと思ったり、今年「笑点」と遊び心にあふれた制作者の「見立て」の趣向は尽きることがない。来年はどんな仏具一式の作品と出会えるだろうか、今から期待が膨らむ一方である。

今年の夏は猛暑のみならず、次から次へと襲来する台風にも苦しめられた。連載の第7回で紹介した滋賀県野洲市行畑地区では、毎年7月末に開催される「行畑地藏祭り」が、台風のために8月に延期となった。

台風が去った行畑で、ようやく目にする事ができたのが、写真の「笑点」という作品である。重ねた座布団の上に座った落語家たちが、大きな口を開けて笑っている。7月に亡くなった桂歌丸師匠の姿と重なって見える。

この作品を作ったのは、第7回と同じ行畑の隣組第11組の人たち。今年も仏具一式を用いてシンプルな「造り物」を制作した。

写真の3人の顔に注目してほしい。一体何をを用いている

仏具は続くよ、どこまでも



大きな木魚を太った腹に見立

た、